

川崎の女性のあゆみ II

～男女平等を求めて～

1970～1980年代



川崎の男女共同社会をすすめる会



川崎の女性のあゆみ II

～男女平等を求めて～

1970～1980年代

川崎の男女共同社会をすすめる

発刊にあたって	編集委員会	5
発刊を祝って 男女共同参画センターすくらむ21館長	三橋君子	6

■川崎の女性のあゆみII

◇女性運動・国連女性の10年

「国連女性の10年」に呼応して	井上輝子	8
平等・発展・平和	山岸俊子	10
川崎の母親運動とともに	渡辺ひろみ	12
女性問題学習の進展と86年の主婦年金制度について	重田統子	14
女性議員として-川崎の女性行政への取組み	大貫和子	17
私の足跡-振りかえってみれば	金田佳枝	21
私のあゆみ-女性問題から環境問題へ	佐尾和子	24

◇社会教育

学んで考えて自己実現に	古徳藤枝	27
私と「婦人学級」の出会い	小林英子	30
生涯教育をめざす	西沢礼子	32
座談会 「菅生分館誕生をめぐって」	武田若子・黒田美智子・友納緑	33

◇子ども・教育

「葦の会」と学童保育	清水容子	35
西三田団地での子育て	吉田晴美	37
柿生の学童保育づくり	杉目待子	38
「子育てを学びあう会」をふりかえって	高橋恵子	41
おやこ映画の思い出	今野 緑	43
住みよい川崎、久末に-子育て、まちづくり	中沢鶴子	44
川崎おやこ劇場に出会って	黒田信子	46
高校、家庭科教師として/男女共学家庭科について	北谷瑞恵	49

◇働く女性・労働問題

産婦人科医師として半世紀	野末悦子	52
看護師から見た、働く女性が置かれてきた状況	鈴木悦子	56
保母として働いて	佐藤洋子	58
大百姓に嫁いで	鈴木幸子	61
法律事務所で働いて	妹尾芙美子	62
色々な差別と闘って	須原信子	64
組合が二つある職場で、働き・育て・学び	藤井光子	66
北海道から内地へ 国鉄分割・民営化の中で	能渡民子	69
生きとし生けるものすべてが幸せであるように	島田悦子	71
座談会 「それぞれの職場環境の中で」	橋本むらを・竹間テル子	74

◇市民運動

米軍基地の跡に高校ができた	内田久米子	78
消費者運動にかかわって	川野安子	80
核兵器廃絶の運動	清水陽子	83
ひとり親家庭の医療費の助成制度制定へ	津脇梅子	85
新鮮な食料が欲しい 私の生き方が変わった	寺田悦子	87
川崎市民劇場と私	相沢雅子	90
公害運動にたずさわって／その後の公害運動	堀田恵子	92

■資料編	97
2012・2013年度男女共同参画協働事業ちらし	98

◇男女平等を求めた川崎の女性たち—川崎の女性のあゆみをたどる— 〈2013年度学習会の記録〉

川崎の歴史と女性たち 1971年～現在	渡辺賢二	99
国際婦人年・「国連女性の10年」と川崎の女性たち	加納実紀代	102
現代史・戦後史のパラダイム 〈2006年学習会資料(1)再録〉	渡辺賢二	104
川崎の女性たち 女性たちは戦後をどう歩んだか 〈資料(2)再録〉	渡辺賢二	106

◇沖縄や在日の方々に聞く 〈2014年度学習会の記録〉

愛するとき、奇跡は創られる—民族文化について考える講座—	宋 富子	108
幸なるかな、川崎の ^{ウチナンチュウ} 沖縄人—沖縄の文化・芸能にふれて—	津波古勝子	112

◇シリーズ川崎の女性と〈国連女性の10年〉

I. 1975～85年の国連の動きと日本・川崎の女性たち	金田佳枝	114
II. 市民と行政の共同のあゆみ	藤井光子	117
III. 「国際婦人年川崎のつどい」から 「婦人の明日をひらく市民のつどい」へ	金田佳枝	120
IV. 1970年代▶▶▶1980年代 私たちのまわりでは	藤井光子	122
『かわさきの女性』より		124
〈再録〉婦人会館と共に歩んだ10年を語ろう		129
用語・運動解説		137
保育所作り運動と川崎保育問題協議会	勝又千鶴	140
グループ・団体紹介		141
年表		142
編集委員ひとこと		154
編集後記		155

発刊にあたって

川崎の男女共同社会をすすめる会

2014年3月 編集委員会

2007年4月のすすめる会編『川崎の女性のあゆみ～男女平等をめざして～1945-1975』発刊から3～4年ほどたつ頃から、幹事会のなかでは、続編作成の話題がちらほら出るようになりました。しかし、1975年に続く時代の激動と複雑さを把握して、冊子を作成するには膨大な時間とエネルギーが必要であることは、火を見るより明かですので、作ろうと率先して言い出せる人は誰一人いませんでした。

そんな折、すくらむ21で企画、すすめる会も協力した〈映画とトークセッション『姉妹よ、まずかく疑うことを習え』〉で講師の井上輝子先生が、「山川菊栄の思想と行動を知る」と題したお話の中で、地域で生きる女性たちの記録としての『川崎の女性のあゆみ』を高く評価して下さり、ぜひ読編を作って欲しいとすすめる会への期待を述べられたのです。その言葉が深く胸に響き、やがて心の中で膨らんできました。

幹事会での度々の論議の末、私たちは2013年度男女共同参画センター協働事業に、2年継続の事業として「川崎の女性のあゆみ II 男女平等を求めて 1975-85」冊子作成の企画を応募し、受託しました。

言うまでもなく、この時期は1975年の国際女性年と「国連女性の10年」（1976-85）に重なります。国連の後押しもあって、男女平等の意識と要求も急速に高まった時期です。日本は戦後の復興期を経て、高度経済成長から低成長時代へと移っていきます。企業は多国籍化して経済大国日本となり「バブル経済」状況の中で私たちは生きていました。

この時期、川崎には全国から労働者が流入し、ここで結婚して、多くの新しい生活が始まっていました。同時に川崎公害など高度成長の陰の部分も出現しました。革新市政が誕生し、町づくりが進みました。戦後川崎の特徴である社会教育活動が盛んになった時期でもあります。

川崎で生き、暮らしている女性たちには、共通して職場での女性差別があり、保育園、学童保育、学校をどうするか、子どもたちの健康を守るためどうするかなど難問に直面します。それらにどう対処し、いかに生きていくかが求められた時代でした。

編集委員会はそういう大勢の女性たちの名前をあげ、様々な分野で活躍した方々に執筆をお願いし、あるいはインタビューをし、テーマによっては座談会で語り合っていていただいて、その時代に生き、活躍された女性たちが、当時どのように感じ、考え、周りの人々と手をつなぎ行動していたかを綴って頂き、掲載しました。

ここに収録された手記を読むと、草の根に生きる一人一人の女性たちが、安心して過ごすことができる環境をつくるために、信頼できる仲間と共に協力し合いながら、市民運動等に生き生きと取り組む姿が浮かび上がってきます。そして男女共同社会を目指す取り組みが、活発に展開されていったことも見逃せません。それでも、やっと出来あがった冊子を見ると、時間及び紙面の制約から原稿をお願いできなかった方も多く、大変残念に思います。

当初、私たちは1冊目の「川崎の女性のあゆみ」2007年刊と、『10周年記念誌 すすめる会の歩み』（1985-95年の記録）の空白期間を埋める記録として、今回の企画に取りかかりましたが、時代を途中で切ることは難しく、結果的に70～80年代をもはみ出す記述も多くなりました。

非専門家である私たちがどこまで出来たかは読者の方たちの評価に委ねるところですが、私たちの前には、これに続く90年代から現在を綴ってくれる若い世代にどうやってバトンを渡すかの、新たな課題が残っているように思えます。

発刊を祝って

川崎市男女共同参画センター

館長 三橋 君枝

本冊子に記録されている1975年から85年までの10年間は、国際婦人年を契機とする「国連婦人の10年」にあたります。川崎でも1975年に開催された「国際婦人年川崎のつどい」に始まるこの時期に、女性たちが自らの置かれている現状を見つめ直し、活動する原動力となっていたことは、ここに収められた寄稿からも明確に浮かび上がってきます。それは私たちが現在当たり前のよう利用し恩恵を受けている諸制度を創設・獲得していくあゆみでもあり、女性が男性と共に自立し平等に生きる社会をめざす礎となるものでした。とりわけ、当時の川崎は、市民1万人に1か所の保育園を設置し、放課後の児童のための学童保育を充実させる等、全国的に見ても、地域において先進的に取り組む、子育てのしやすい都市として市内外から評価されていました。私自身も同時代に川崎で働き、子育てをするなかで、働く女性のために活動された先輩の方たちの成果を実感し、感謝してきた一人です。

この転換期から30年近くが経過し、当時活動の中心を担っていた方たちが高齢となっていくなか、川崎における女性活動の歴史を今まとめ、次世代に語り継いでいかなければという、川崎の男女共同社会をすすめる会の皆さまの決意は、力強く熱いものでした。そうした決意を源流としながら、川崎市男女共同参画センター協働事業として2年にわたり活動され、寄稿者おひとりおひとりへの依頼や聞き取りを行い、公開学習会を開催し、自らも執筆される等、地道に積み重ねた成果が、この「川崎の女性のあゆみ」には溢れています。そして、それらの記録や想いは、たんに過去の出来事ではなく、現在と未来へとつながるメッセージでもあるはずです。

川崎の男女共同社会をすすめる会の皆さまが積み上げてきた2年間の活動とその努力を、そしてこの完成した冊子を、多くの地域の皆さまに伝えていくことは、川崎の男女共同社会実現への一歩となると確信しています。本冊子発刊が川崎の男女共同社会をすすめる会の今後の益々の発展に結びつくことを祈念いたします。